19 世紀中期までの英国女性教育論の展開と女性の自律について（１）[1)]

Advocacies of Education for Women in England up to the Mid-19th Century and Women's Autonomy（１）

溝口　薫

Kaoru MIZOGUCHI

神戸女学院大学文学部英文学科 教授
English Department, School of Literature, Kobe College
k-mizogu@mail.kobe-c.ac.jp

Abstract

The purpose of this paper is to survey several important advocacies of education for women up to the mid-19th century in England in order to offer a historical and cultural perspective on literature and culture of those times. While delineating their arguments for education for women, this survey traces some aspects of the arguments in common, for they eventually stimulated early feminists to form a movement for higher education open to women during the latter half of the century. The paper consists of two parts (1) and (2). In the first part, the advocacies made by Mary Astell, Hannah More and James Frederick Denison Maurice are examined. Although they had different ideas about education for women, they shared a deep concern about developing women's mental and moral autonomy trusting women's intelligence. In the second part, the advocacies made by Hannah More, George Eliot who discussed the arguments of Mary Fuller and Wollstonecraft, and James Stuart Mill are examined. Unlike the former advocates, these feminists were not educators themselves, but defended education freely open to women, based on the idea of diversity of women's abilities equal to men's. They also stressed women's mental and moral autonomy developed through education as a crucial factor to form a better relationship with men. They insisted on such education for women not only for their own well-being but for better mental welfare and interrelationships in the whole society, the state of which they said it would take a long time but would be attainable.

キーワード（１）：19 世紀朝中期までの英国女性教育論、メアリー・アステル、ハンナ・モア、ジョン・フレデリック・モーリス、女性の自律

Key Words（２）: Advocacies of Education for Women in England up to the mid-19th Century, Mary Astell, Hannah More, John Frederic Maurice, women's autonomy

１　はじめに

女性の教育、ことに高等教育論の歴史的展開についての知識は、女性をめぐる文化・文学研究教育には欠かせないものであろう。なぜならそれは、女性を宗教的、社会的に低位に位置づけてきた伝統的ジェンダーイデオロギーに対する大きな挑戦であって、ほぼ 200 年以上をかけて両性対等の権利として保証されるに至っているからである。その挑戦のなかで、特に 60 数年に及ぶヴィクトリア朝期を通しての発展は著しく、ために 19 世紀後半におけるその成果こそ、女性の権利や政治的平等をめぐる諸運動とともに取り上げられることが多いが、それに至るまでの女性教育をめぐる議論については、現代フェミニズムの先駆者として位置づけられる Mary Wollstonecraft（1759-1797）の議論を除いては、あまり注目されてこなかった。しかし昨今ようやくその前後における女性たちの活躍や主張に関する詳細な研究が改めて盛んになってきている。本論は、それらの成果に基づき、19 世紀前半までの女性高等教育論について概観するものである。本論のもう一つの目的としては、それまでは教育の対象とされていなかった女性たちを教育へ、高等教育へと牽引してきた要素は、何であったのかを明らかにすることである。立論された女性教育論の中心的概念を追う試みは、19 世紀文学、文化研究に興味深い視点を提供するはずである。なお、紙数の都合上、本論は 17 世紀の終わりから 19 世紀中期までを二部に分ける。タイトルに示すように、前半部を本論の（１）とし、ここではモーリスによる最初の女性カレッジ誕生までの重要な女性教育論を扱う。後半部は、本論の（２）として、特にモーリスの教育論以降 1860 年代までのフェミニストたちの女性教育擁護論を扱う。

２　英国女子高等教育論の始まり

イギリスにおける女性高等教育論者の起源とみなされているのは Mary Astell (1666-1731)である。今日でこそ、女性教育の理論、ノリスやロックに関する批評で知られるが、アステルの存命当時、その優れた思想について知っていたのは、少数の理解者、パトロンに過ぎなかった。また書物もパトロンによって出版されて版を重ねたものもあったが、現在彼女の思想を知る手掛かりは、ほとんどパンフレットや書簡に限られている。中産上流階級に生まれたアステルは、家庭で同居している叔父から優れた教育を受けたが、やがて思想の合理的知的探求によって周囲に知られるようになり、援助を受けて文筆を続け、また後に

女子のための慈善学校を開いている。

アステルが女性に教育が必要と考えた理由は、宗教的なものであった。アステルは、それまで女性が生まれながらに「堕落した存在」[2)] として定められ、魂の救済が得られないと考えられていた状況に対して、論理的思考のみによって「この状態は社会的条件の押しつけに過ぎない」と論破したのである。また「女性は男性と同様、寛容さを持つように生まれ、知的完成に向けての努力ができる存在」であると定義した。アステルは女性が救われないと考える状況を「堕落した存在として神に定められていると思い込んでいるために、自分からよくなろうとしないばかりか、良くなろうと思っても、結局自分の素性に対して根本的な疑念を抱かざるを得ず、ゆえに女性は、もともと高慢で虚栄なのだから改善などは望めないという偏見に沈んでいく」と考えている。アステルの教育論は、このように女性をめぐる合理的認識論に基づいている。

アステルは、女性が「生まれながらにもっている合理的知的能力を、形而上学的内省によって完成させる」ことを目指す。そして、その「知性の享受により、寛大さと美徳を涵養し、それによって宗教的救済に達する」と述べ、「肉体と精神を混同させたままでは死においてその魂は救われない。だが知的に自らを深く振り返る思考」を通して救われようと説くのである。Sowaal が述べるように、アステルの提唱した教育は、職業教育でも、また、あらゆる偏見から自由になり人間を解放することを目指す liberal education でもない。彼女のマスターしたデカルト認識論によって、解決の見えない宗教的呪縛から自由になる哲学的教育であった。アステルは、例えば、以下のような６つのルールを提案している。

１）問の形で徹底的に自分を知りなさい、何にせよ自分のテーマについてはっきりとした観念と言葉を持つようにして、狙うところを正確に知るようにしなさい。

２）考えるときは、何にせよ、当該の事柄に必要でないことは、切り離しなさい。

３）順序だてて考えるように。まずもっとも単純で簡単なことから始めて、次第に構造的な理解へと進みなさい。

４）まだよく検討していないテーマの場合、部分を抜かさないこと。

５）テーマについては、いつも眼前にまっすぐにおいて取り組みなさい。そしてその間ずっとそのことについて綿密に追求しなさい、それが進歩です。

６）知覚する以上に判断しないこと。また、それとはっきりわからないのに、なんでも真実だと思わないこと。[3)]

アステルのこの提案は、ジェントリー階級以上の女性に向けられていた。「彼女たちは方法がない。彼らはどうやって魂を見つめたらよいのかわからないのだ。あるいは、たとえ自分を見つめようとしても、どうやって正したらよいのかわ

からないほど無秩序であるということがわかるので、支えが欲しいのだ。（それがなければ）世界の困難に怯え、よくなろうとすることを放り出してしまうので」[4)]。アステルの教育とは、女性たちの「救済」の渇望に応えるものではあるが、実際は、内的な探求と哲学的修養の継続により、女性の知的、精神的自律性の発達を実現するものであるといえよう。アステルは、その女性教育論のなかで、女性が生涯精神的探求を行えるような高等教育機関の設立（カレッジ）をも提唱している。

３　１９世紀初期に影響力のあった女性教育論

さて 19 世紀の高等女性教育機関の誕生期までに、今一人振り返りたい女性がいる。Hannah More（1745-1833）である。同時期のウォルストンクラフトによる女性の権利思想が過激であるという理由によって嫌われたのとは異なり[5)]、モアの活動や主張は、その存命中に世の中に広く受け入れられ、英国国民全体に渡る道徳性向上運動をリードした詩人・劇作家・博愛主義運動家として尊敬を集めた。実際に彼女が対象としたのは、堕落した貴族、労働者、そして、女性である。特に女性教育に関しては、両性の生得的違いを説いて、女性を「生まれながらの有徳性と敬虔さを備えた存在」[6)] として捉え直し、その特性を発展させるための教育を説き、初級学校を開設した。

彼女は、女性のこうした天性の性質を教育よってさらに磨くことを求め、「聖書や宗教パンフレット、また真面目な文学を読むこと、また、理性的な会話や同情や寛容の積極的な発揮によっても涵養される」と勧めた。さらに「理性的な知性、慎みと清純、精神的な価値やキリスト教に真面目にコミットすること、家族への愛情深い献身、コミュニティへの積極的な奉仕、約束を守る」ことを女性の理想像として提示した。このモアの提唱する有徳な理想的女性像は、それまでの「肉体的な美しさを持ち、効果的に財産のある男性を結婚に引き付けるため種々の嗜み（accomplishments）を持つ女性」という女性理想像とは真っ向から対立するものであり、道徳的向上を求める女性たち、そして男性をも引きつけ、やがて女性のあり方に関する文化的再定義を促すことになる。

ちなみにモアの教育論は、女性たちに社会における「キャリア」をも与えるものであった。モアは、上記に見えるように、女性に、恵まれない人びとに対する「積極的なコミット」としてチャリティ活動を勧めている[7)]。モアは、これを女性の「天来の任務 」(“calling”)、また公的な「職業」(“profession”）と呼び、チャリティによって女性に「生涯のミッション」を与え、社会的なエンパワメントをもたらそうとした。またモアは、一方で、女性たちの上手な「家政」を国家経済のモデルとしても位置づけている。「女性の懸命な財務的道徳的努力は、使用人も含む家族全体の、身体的感情的宗教的なニーズを満たす」とも述べており、家庭内、コミュニティ内、そして国家的にすら影響力のある女性の

役割の潜在的大きさとその中核たる道徳的な存在意義を説き、女性の意識覚醒を促したのである[8)]。

ハナ・モアが率いたこの文化向上運動は、女性論、教育論を刺激し、特に無秩序に実施されていた女性学校教育にも風紀改善がもたらされることになる。中流階級の女性が 18 世紀後半から 19 世紀の前半において学校に通うとしたら、finishing school「花嫁学校」がもっぱらであったが、それを除けば、女性教師になるための慈善学校である「チャリティスクール」であった。Charlotte Brontë（1816-55）の『ジェイン・エア』（1847）において主人公が通う学校もそれであるが、当時のチャリティスクールにおいては、そこに描かれているような劣悪な環境や偏見で歪んだ教育は珍しくなかったのである。しかし時代はそれらを放置されてはならないスキャンダルとして社会的に問題視するようになり、この小説でも示されているとおり、学校の外部に設立された委員会からの介入、調査により、状況は改善されていくようになる。

また『ジェイン・エア』の背景となっている 1820 年代頃、女性のための教育の必要が広く世の中の耳目を引いていたことは、かの Charles Dickens（1812-70）の母親が夫の借金を返そうとして女子学校経営に乗り出したというエピソードもよく示すところである。当時学校を開くのに特に資格も法律もなかった時代であったから、学校設立は簡単であった。とはいえ、それは無謀な計画ではあった。張り紙をあちこちの通りに張り出したにもかかわらず、結局誰も生徒が集まらず、この急ごしらえの計画はディケンズ一家にさらなる借金を増やすだけの散々な結果に終わる。ステークホールダーから教育の内実が無いことを見透かされた当然の結果ではあった。しかし、皮肉なことに、この失敗は、文学的には興味深い成果を残すのである。この事件も一因となって、後のディケンズは、愚かで悪しき母親、あるいは、反転して若い天使的な女性を多くの小説のなかに描いていくことになる。

4　女子高等教育機関設立とジョン・モーリスの教育論

19 世紀イギリスにおいて最初に女子高等教育機関が設立されたのは『ジェイン・エア』が出版された翌年、1848 年のことである。この機関は、それまでのチャリティスクールとは異なって、質の高い女性教師を世に送り出す目的で設立された名実ともに高等教育機関であった。学校名は College を冠し、Queen’s College for Ladies と呼ばれた。1843 年に女性教師養成の質改善を図るべく創設された Governesses Benevolent Institution（ガバネス慈善協会）の支援を得て生まれたカレッジである[9)]。正確にいえば、junior college（短期大学）というべき性格のものであるが、ともあれ、女性に必要な学問領域を幅広く学ばせ、試験を課して家庭教師の資格証書ディプロマを「学位」として授与という、本格的な質保証を実現した女性高等教育機関であった[10)]。ちなみに、ジュニア・カレ

ッジといえば、それまでは、正規の大学カレッジ入学のための準備教育として男子校しかなかった。このクイーンズ・カレッジが受け入れた女子は、貧富を問わず 12 歳以上であった。

この機関の立案者が John Frederick Denison Maurice（1805-1872）である。英国国教会の神学者、キリスト教的社会主義の創設者の一人として知られるが、労働者のための学校設立など数々の社会運動を立ち上げた活動家にして、膨大な著作を残したケンブリッジ大学キングスカレッジの教授でもあり、またよき教師でもあった。モーリスは後にその社会的活動のために反体制的とみなされ、キングスカレッジの教授職を解かれることになるが、彼の偉業は第二次世界大戦以降になって見直され始めてきた。

モーリスがこの学校のために無償で奉仕した期間は短い。しかし彼の構想は土台がしっかりしており、結局長く受け継がれている。School でも establishment という名称でもなく、高等教育を意味するカレッジという名にふさわしい教育のデザインとして、彼が特に留意した事柄については、彼の 1848 年 3 月 24 日の講義録「ロンドン、クイーンズ・カレッジの大学の目的と方法について」に詳しい[11)]。その設立において目指されたことは、「授業の質を上げること」、「参加する一人一人を力づけること」、そして「新たなメソッドが取りいれられる」ことであって、モーリスはこの教育により「つぎの世代のためのガバネスは、永遠に今よりよい社会的地位を得るはずである」と意気軒昂に述べている(4)。

モーリスがこの女性教育機関で学ぶよう定めた分野は、ラテン語、ギリシア語こそ省かれたが、絵画、音楽、算数、数学、自然科学、フランス語、ドイツ語、イタリア語、英語、英語文学、教育法、地理、神学であった。これらの講義は、キングスカレッジの彼の同僚メンバーが行った。そのなかには、モーリスに心服していた Charles　Kinsley もおり、彼は英文学を教えた。モーリスは「裕福な人に与えられる教育をそうでない人にも」与え、また内容的には「男子に教育を与えると同じものが、女子にも当然必要である」と述べている。女性は、もはや時代遅れの accomplishments「嗜み」ではなく、実際的で「有用な」知識を学ぶよう勧めているが、その考え方が上記のカリキュラムにも反映されている。

また、彼によると、同時代の女性教育の弊害は「多くを学びすぎ、内容が本当には身につけていない」点であるとし（6)、教育上の工夫を説く。彼は、「物事の『根』にあたるところをしっかり学ぶ」ことを奨励し、「単なる機械的学習ではなく、心で学ぶ学び（“learn by heart”）」を強調する。また「競争によらない教育」あるいは「賞罰によらない教育」を推進するのも特徴である[8)]。そのことは少し注意を要する。なぜなら、それらこそ、学ぶ者の知的自発性、自律性を育成していく本来的な教育方法といえるからである。

彼は、また教師を目指す学生に「教育という職業は恐ろしいものである（“awful one”）」（2）とも述べている。「それを認識していない者は、本当の善をなせな

いばかりか、言葉に表せないような害を及ぼす」と述べ、教師として持つべき精神的姿勢について説くのである。また「単に必要なことを教える、あるいは手助けをして身につけさせる、ということだけでは、やる気や内省、将来への配慮などを認識させることができるとしても」それだけでは不十分であると強調する。彼は、教師とは、学習者がその人生の途上で「リボンを売るというような差し迫った状況に立ち至ったとしても、合法的にそれを引き受けるだけの不滅の魂をその訓練において養う、という考えを持たねばならない」と述べている。彼がその教育でもっとも重視したのは、このように、知的、道徳的に優れた自律的な精神の養成であった。

モーリスの教育機関が設立された意義は大きい。一つには、教師としての高い質の資格を学位という形で社会的に保証する高等教育機関を作ったことである。また学生一人一人に配慮して、その知識と技能を高めるとともに、自発的、自律的な知的精神を培い、さらに未来に引き受けることになる生徒の教育目標として道徳的な自律性の確立を目指させるなど、教育の目的と方法が一致して優れた人格を育成する組織的教育を実践したことである。この新しい教育機関で学ぶ女性たちの士気を高めたであろうことは容易に想像される。事実、その志を継ぐ女性が誕生し、次の時代を創造していく[12)]。また、このカレッジは幾多の女性教育機関のモデルとなり、さらに学校設立が盛んになってゆく。また自然なことであるが、女性たちは、ラテン語やギリシア語、高等数学など、本格的な正規大学教育を求めるようになる[13)]。このように、モーリスの女性高等教育機関の設立が齎した「成功」は、さらなる社会的関心と女性たちに種々の「目覚め」をもたらしたが、皮肉なことに、反発も引き起こし、否定的な世論が形成されるなかで、女性たちの正規高等教育への希望実現は、一旦遠のくのである。

文献と註

1）本稿は、2017 年 12 月 1 日、奈良女子大学で開催された、奈良女子大学／神戸女学院大学共同ジェンダーシンポジウム「女子大で文学を？！」における講演原稿「「英文学、ジェンダー、女子大―まだ終わらないミッション：19 世紀前半の女性高等教育論からこれからの授業へのヒントを得る」の一部を改訂したものである。

2）Sowaal, Alice, "Mary Astell", *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Winter 2015 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL=<https://plato.stanford.edu/archives/win2015/entries/astell/>. 以下の引用はこのソースによる。

3）Astell, Mary. (2002) *Serious Proposal to the Ladies for the Advancement of their Ture and Greatest Interest*. Patricia Springborg. (Ed.), Broadview Press. pp.176-9. 初版は 1694 年、1703 年までに 6 版を重ねている。

4）Astell (2002), p.124.

5）ウォルストンクラフトの女権思想は女性参政権や男女共学教育論も含む。その主張は William Thompson が Ann Wheeler と共著で出版した *Appeal of One-Half the Human Race, Women against the Pretensions of the Other Half, Men,* (1825)が引き継ぐ。*An Oxford Companion to the Romantic Age: British Culture 1776-1832.* Iain McCalman.(Ed.),1999.p.758.

6）出典は Anne K. Mellor, “Hannah More, More Revolutionary Reformer.” URL=<http://www.ampltd.co.uk/digital_guides/women_morality_and_advice_literature_parts_1_to_3/Hannah-More-Revolutionary-Reformer.aspx.> モアに関する引用はこのソースによる。

7）“*Charity is the calling of a lady; the care of the poor is their profession.*” モアの *Coelebs in Search of a Wife* (1809)より（Mellor）。イタリック体はモア自身のもの。

8） Mellor によると、モアは後にその道徳文化革命のリーダー役としての性的役割を女性から削るが、新たな女性理想として“passionlessness”をも打ち立ててゆく。

9） Adamson, John William.(1964) *English Education 1789-1902*. Cambridge U.P., p.283.

10）Barnerjee, Jacqueline. *Queen’s College and the “Ladies’ College”* The Victorian Web.

11）Maurice, John Frederick Denison. “Queen’s College, London Its Objects and Methods”, *Female Education Considered: Nineteenth-Century Britain.* Setsuko Kagawa (Ed.), Thoemmes Press. 2002, pp. 1-17.以下モーリスの引用はすべてこの版により、引用箇所は括弧を付けページ数で示している。

12）1850 年代女子教育に貢献したこの機関の卒業生に Frances M. Buss や Dorothea Beale がいる（Adamson, p.284）。

13） Sarah Emily Davies は、英国における女性に正規の高等教育である大学への入学の権利を求める運動の主導者であり、後半の議論で述べるボディションとともに、1869 年、Cambridge University に最初の正規女子大学 Girton College の設立に関わった。デイヴィーズは、このクイーンズ・カレッジの教育に触れて“Women are expected to learn something of arithmetical science and who shall say at what point they are to stop?” と述べ、正規大学教育論を展開する。50 年代にクイーンズ・カレッジなどの新しい女性教育機関に関する報告書がまとめられているが、そのなかで女性の大学への進学を勧める一文を載せた調査委員会委員長 Edward Thring などが、デイヴィーズの賛同者となった。Josephine Kamm. (1965) *Hope Deferred*. Routledge, pp.250-1.